

令和 2 年 4 月 16 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02542

研究課題名(和文) ジェンダーの視点から見た19世紀フランス文学と造形芸術の相関性

研究課題名(英文) Correlation between the 19th French Literature and the formative arts from the viewpoint of the gender

研究代表者

村田 京子 (Murata, Kyoko)

大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・教授

研究者番号：60229987

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ロマン主義文学(スタール夫人、バルザック、ジョルジュ・サンドなど)から自然主義文学(ゾラ、ラシルド、ゴンクール兄弟など)まで、19世紀フランス文学を作品と関連のある造形芸術(絵画・彫像)と密接に関連させて、ジェンダーの視点で読み解いた。とりわけ、19世紀に覇権を握ったブルジョワ階級の父権的な価値観に基づく「女らしさ」「男らしさ」の範疇から外れる人物に焦点を当て、どのような点で「女らしさ」「男らしさ」に欠けるのかを検証することで、当時のジェンダー観を浮き彫りにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本のフランス文学研究において、これまであまりなされて来なかった、ジェンダーの視点による作品分析を行ったことに本研究の学術的新しさがある。また、文学領域のみならず、美術の領域ともリンクさせた領域横断的な研究となっている。さらに、ホームページで本研究にかかわる講演会や論文の内容を発信するだけでなく、研究成果の一部を一般読者にもわかりやすい内容にして、教養書(図版も多数掲載)として出版することで、研究成果の公開を積極的に行っている。

研究成果の概要(英文)：I analyzed deeply the 19th Century French Literature, from Romanticism (Madame de Stael, Balzac, George Sand, etc.) to Naturalism (Zola, Rachilde, the Goncourt Brothers, etc.), associating it closely with the formative arts (pictures, statues), from the viewpoint of the gender. I focused my study in particular on the characters left out of the category of the womanliness or of the manliness, which is based on the values of the paternal authority in Bourgeois society. And I made clear the gender view of the 19th Century France by verifying at what kind of point they lack in the womanliness or in the manliness.

研究分野：19世紀フランス文学

キーワード：19世紀フランス文学 ジェンダー 造形芸術

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究者は、2011年度～2014年度にかけて基盤研究(C)の研究課題「ジェンダーの視点から見たフランス・ロマン主義と絵画の相関性」のもと、19世紀前半のロマン主義文学(スタール夫人『コリヌ』、バルザック『毬打つ猫の店』『ラ・ヴェンデッタ』、ジョルジュ・サンド『ピクトルデュの城』、マルスリーヌ・デボルド=ヴァルモール『ある画家のアトリエ』、テオフィル・ゴーチュ『カンダウレス王』)で言及される絵画と登場人物および小説美学との関連、女性作家の画家像と男性作家の画家像の相違点(バルザック作品とサンドやデボルド=ヴァルモールの作品との比較対照)、19世紀当時の女性画家(男装の画家ローザ・ボヌールの生涯と作品)をジェンダーの視点から検証した。

その研究成果の一部をまとめて出版したのが、『ロマン主義文学と絵画——19世紀フランス「文学的画家」たちの挑戦』(新評論、2015年)である。さらに、2015年には19世紀後半の自然主義作家ゾラの『ナナ』を取り上げ、ナナの危険な力(セクシュアリティ)をアカデミー絵画や印象派などの絵画と関連づけて分析した。

本研究は、以上のような研究成果を発展させる形で、研究対象をロマン主義文学に限らず、19世紀全体の文学作品に広げて考察を深めることを目的とした。

### 2. 研究の目的

- (1) 19世紀フランス文学と造形芸術(絵画・彫像)の相関性を、小説構造や小説美学、作家の芸術論を密接に関連させて考察・分析する。
- (2) 文学テキストで言及される芸術作品(絵画・彫像)を、特にポルトレ(人物描写)を中心に、ジェンダーの視点から探る。また、女性作家の描く人物像に焦点を当て、男性作家とは異なる点を明らかにする。
- (3) 芸術家小説における男性作家と女性モデルの関係をジェンダーの視点から分析する。

### 3. 研究の方法

- (1) 文学テキストの中で造形芸術、または画家・彫刻家に言及している部分を抽出し、造形芸術が小説構造、小説美学に与える影響を探る。
- (2) 比喩として絵画・彫像を援用しているポルトレを抽出し、19世紀当時の「女らしさ」「男らしさ」の概念と照らし合わせながら分析する。
- (3) 芸術家小説において、男性画家と女性モデルの関係を作家の芸術論、同時代の画家の影響を考慮に入れながら、ジェンダーの視点から探る。

### 4. 研究成果

#### (1) 2016年度の研究成果

① **ジョルジュ・サンドの作品研究**：『ジャンヌ』を取り上げ、女主人公ジャンヌが古代ギリシアの彫像に喩えられ、さらに彫刻家カノーヴァのマグダラのマリア像やピュグマリオン神話のガラテアなど、彫像に喩えられていることに注目し、「彫像」のイメージの象徴的な意味をジェンダーの視点から探った。まず、この作品が「古代の未開状態」と「近代文明」が対峙するコントラストの小説であり、前者は地理的に文明社会から遠く離れた、ドルイド教の遺跡の残る「未開の土地」トゥル=サント=クロワの農民たちがその代表であり、「近代文明」はブザック城に住むブルジョワ階級によって代表されることを明らかにした。「ドルイド教の巫女」に喩えられるジャンヌは「古代の未開状態」の表象として「原初の無垢」を持ち続け、自然と深く結びついた「知恵」を母親から受け継いでいた。

物語前半では、文明側の人々が彼らにとって「謎」を秘めたジャンヌを「彫像」とみなし、そこにそれぞれの夢や欲望、理想を投影して「物語」を構築していた。それゆえ、語りの構造において浮き彫りにされるのは、彼らの眼を通したジャンヌ像であった。一方、ジャンヌにとって、「彫像」のイメージは、「欲望の眼差し」から身を守る「鎧」となっていた。彼女の「謎」が明らかになる物語の後半部分では、ジャンヌは主体性を持ち始め、文明側とは異なる視線による社会批判を展開するようになる。ジャンヌは、暴力的な男の宗教とは異なる、平和で寛容な宗教＝「女性的な原初の宗教」を信奉し、そこに作者サンドの理想を見出すことができた。

以上の研究に基づき、フランスにおけるジョルジュ・サンド国際シンポジウム *George Sand et le monde des objets* (於 クレルモン大学、2017年6月19日)で、フランス語で口頭発表を行い、「彫像」を手掛かりに作品分析を行った研究手法に対して、高い評価を得た。日本語論文は、大学紀要に掲載。

② **ゾラの作品研究**：『獲物の分け前』を取り上げ、「モードの女王」として第二帝政期のパリ社会で君臨した女主人公ルネに焦点を当て、衣装と人物の関係を、作品と関連するアカデミー絵画や印象派の絵画などに結びつけながらジェンダーの視点から探った。まず、最新流行の豪華な衣装をまとったルネの身体は、ファッション・プレートのマネキンと同様に、衣装を引き立てる「モノ」でしかなく、印象派の画家たちの「肉体をモノとして提示する」やり方に類似していることを明らかにした。ルネがまとう豪華な衣装は、夫の「社会的・経済的威光のバロメーター」に過ぎず、彼女は夫の「顕示的消費」の対象となっていた。さらに、彼女は「政治的身体」として権力者に利用されたばかりか、自らの財産も夫に奪われ、最後は文字通り夫に身ぐるみ剥がされて死に至っている。贅沢と浪費の渦の中で「神経的な変調」をきたすルネは、第二帝政社会の

虚飾と腐敗を体現する一方、彼女自身の身体がモノ化され、男たちに操られる「人形」として、搾取の対象となっていた。

以上の研究は女性学講演会（於 大阪府立大学、2016年10月8日）で口頭発表し、それに基づいて論文にまとめ、講演会集に掲載した。

## (2) 2017年度の研究成果

①**バルザックの作品研究**：『あら皮』『ラ・ラブイユーズ』『従妹ベット』を取り上げ、『人間喜劇』における娼婦と食の象徴的な関係を探った。『あら皮』では宴会の描写において、バルザックは料理の内容よりも食堂や食器の贅沢さを強調している。しかし、デザートに関しては詳細な描写を行い、とりわけ色彩豊かな様々な果物を形容する言葉は、官能的な女の肉体＝娼婦を想起させる。娼婦たちと果物との相関関係が容易に見て取れ、娼婦は男たちに差し出された「食べ物」であった。その中で脚光を浴びる二人の娼婦は「本物の娼婦」の範疇に属している。こうした娼婦にはしばしば「食べる」「食い尽す」といった消化作用に関連する用語が使われ、その結果、娼婦は男たちの「食べ物」として消費の対象に還元されると同時に、彼らの財産や生命、更には自らの命も「食い尽す」存在となる。

『ラ・ラブイユーズ』では、フロール・ブラジエという地方の娼婦が登場する。フロールは『あら皮』の娼婦たちと同様に「食べ物」と同一視されているが、後者とは違い、料理の腕前を磨くことで主人への支配力を強めていく。さらに彼女は御馳走によって、主人の性欲を抑制しようとする。それに関しては、作者は、性生活と食養生を結びつけて考える当時の衛生学者たちの言説に従っていた。要するに、過剰に食べさせることは去勢行為に等しかった。

『従妹ベット』のヴァレリー・マルネフも、自らの肉体を「食べ物」として男たちに差し出す「亭主たちの娼婦」として「本物の娼婦」と一線を画し、全てを蕩尽するどころか、富の蓄積に邁進している。言わば、娼婦のブルジョワ化が生じている。ヴァレリーは、『人間喜劇』の野心的な青年たちと同様、食の次元での上昇運動に身を投じている。さらに、ヴァレリーとその恋人が逢引する貸し部屋での場面でも、ブルジョワ精神が露呈する。この貸し部屋は、当時有名であったメゾン・ドレの個室を想起させ、娼婦たちの集うレストラン（実在のロシェ・ド・カンカル）も物語の舞台として使われている。このように、本研究では食と娼婦の密接な関係を明らかにしたが、分析にあたっては、娼婦と「食べ物」に関連する絵画にも注目した。

以上の研究成果をバルザック国際シンポジウム *Balzac et la représentation de la Table. Journée d'études internationale*（於 大阪府立大学、2017年9月23日）でフランス語による口頭発表を行い、フランス語論文はフランスの権威ある学術雑誌 *L'Année balzacienne 2018* に掲載された。

②**19世紀フランス文学・絵画における両性具有的存在の研究**：19世紀フランス文学における「男らしさ」と両性具有的存在との関係を絵画とも絡めながら探った。まず、19世紀における「男らしさ (virilité)」の特徴（名誉、優越性、自己抑制、英雄的な死、女性への支配、逞しい身体および性的能力の強さなど）を抽出し、こうした「男らしさ」を視覚化したのが新古典主義の画家ダヴィッドの《ホラティウス兄弟の誓い》であった。同時にダヴィッドは、《バラの死》でこうした規範に当てはまらない男性像（女性化されたエロチックな身体）を描いているが、バラ像はフランス革命における「男らしさ」を体現するものであった。そこには、18世紀の美術史家ヴィンケルマンのヘルマプロディトス像礼賛の思想が大きく関わっていた。

次に、ロマン主義文学における両性具有像を、ラトゥシュ『フラゴレッタ』、バルザック『サラジーヌ』、ゴーチエ『モーパン嬢』、バルザック『金色の眼の娘』と時系列順に取り上げ、ヴィンケルマンの影響を考慮に入れながら検証した。これらの作品分析の結果、古代の彫像の神話的次元では、両性具有的存在は男性性と女性性を調和的に融合した「理想美」として捉えられるものの、現実の世界では「怪物・奇形 (monstre)」として社会から排除される運命にあることが判明した。また、『モーパン嬢』のテオドールや『金色の眼の娘』のアンリのような両性具有の男性は、女だけではなく男の「欲望の理想的な対象」、さらに、男の「理想の自己」となる。

このように本研究では、ロマン主義文学における両性具有的存在の両義性（「怪物」とみなされる一方、若い時には「男らしさ」の範疇に組み込まれ、男の理想像を表す）を浮き彫りにした。しかし19世紀後半ではゾラの『獲物の分け前』のマクシムやラシルドの『ヴィーナス氏』のジャックのように、両性具有的な男性はもはや男の理想ではなく、男にも女にもなりきれない「欠如」の存在となる。それが「男らしさ」の危機をもたらしたと言えよう。

以上の研究は、日本フランス語フランス文学学会秋季大会、ワークショップ「19世紀フランス文学における『男らしさ』の危機」（於 名古屋大学、2017年10月29日）で口頭発表し、多くの参加者と活発な質疑応答を行った。ワークショップで発表した内容をさらに充実させて、女性学講演会（於 大阪府立大学、2017年12月16日）で発表し、日本語論文を講演会集に掲載した。

## (3) 2018年度の研究成果

①**女性作家と「捨てられた女」のテーマの研究**：文学的クリシェ「捨てられた女」のテーマを古代ギリシアの詩人サッフォーのイメージに遡り、「捨てられた女」のテーマを19世紀の女性作家がどのように扱っているのか、男性作家の作品と比較しながら、スタール夫人とジョルジュ・

サンドの作品を取り上げて検証した。

サッフォーの詩の世界は本質的に「女人の世界」であり、美青年に失恋して断崖から投身自殺したとされる伝説は、オウィディウスが作り上げた文学的虚構であった。さらに『ポルトガル文』の大流行によって、「捨てられた女」のイメージ（「涙」「苦しみ」「狂気」「孤独」）が「真実味のある」女性像として定着した。しかし、それは父権的価値観に基づく「女らしさ」に過ぎず、男性作家のファンタスムの産物であった。

スタール夫人の作品（『デルフィーヌ』『コリンヌ』）は、女性に対する社会の不平等を告発すると同時に、たとえ栄光に包まれた女性でも、男の保護なしには幸せになれないという矛盾を抱えている。それは、スタール夫人が保守的な父の考えを内在化し、「書くこと」に罪悪感を抱いていたからだ。コリンヌのような「並はずれた女性」は社会から疎外される存在であり、彼女の死は「捨てられた女」のイメージが踏襲されている。しかし、結末部分で女性から女性へと才能が受け継がれる場面が描かれ、そこに、男や愛情のみに依存した状態に閉じ込められることへの女の側からの拒否が見出せる。

サンドの『ラヴィニア』は、バルザックの『捨てられた女』への反論書となっている。恋人に捨てられたラヴィニアは一時、憔悴状態に陥るが、10年後には魅力的な「新しい女」に変貌し、社会から排除されて孤独に陥ることもない。その自立した生き方には、女性の解放と幸福への権利を信奉するサンドの考えが反映されている。『メテラ』も同様で、最後は男の恋人への愛情よりも、女同士の連帯に重きが置かれている。

このように本研究では、男性作家が作り上げた「捨てられた女」像をスタール夫人やサンドがいかにか新しい女性性の表象に作り変え、女性作家の代弁者にしたかを検証した。また、19世紀の絵画やカリカチュアにおいて、投身自殺をするサッフォーの姿が多く描かれ、それが「捨てられた女」のイメージを定着させる要因になったことを明らかにした。

以上の研究成果を日本フランス語フランス文学会春季大会、ワークショップ「女性作家と文学場のジェンダー」（於 獨協大学、2018年6月3日）で口頭発表し、参加者と活発な質疑応答を行った。発表内容をさらに充実させて論文にまとめ、大学紀要に掲載した。

**②ジョルジュ・サンドの作品研究：A. 田園小説について：『魔の沼』『愛の妖精』『ジャンヌ』**を取り上げ、サンドの田園小説において、「田舎」がどのように表象されているのか、絵画とも絡めて検証した。まず、「リアリズム文学の祖」とされるバルザックの作品との違いを明らかにした後、サンドの民俗学者的な側面に焦点をあてた。次に、サンドの作品は、農民の牧歌的な恋愛を歌った「パストラル」のジャンルには属さず、サンドが現実の農民の実態に即したリアリストであることを浮き彫りにした。また、農民自身が語りの主体となっていることも、サンド作品の特徴である。最後に、サンドの理想主義的側面に焦点を当て、『ジャンヌ』『魔の沼』を手がかりに、「文明人」（＝ブルジョワ階級）と対峙する無垢な「原初の間人」としての「農民」像を検証し、サンドにおける芸術家の使命および「田園小説」の意味を明らかにした。分析にあたっては、ホルバインの絵画や同時代の女性画家ローザ・ボヌールの風景画と密接に結びつけて考察した。

以上の研究成果は、シンポジウム「19世紀文学における田舎の表象」（於 京都外国語大学、2019年1月26日）で口頭発表し、他の発表者（デンマーク文学、アメリカ文学の専門家）とも意見交換し、欧米文学における「田舎」の表象の違いを論じた。

**B. サンドと女優マリー・ドルヴァルについて：**ロマン派劇を代表する女優で、サンドと親しい関係にあったマリー・ドルヴァルがサンドの作品に及ぼした影響を探った。まず、ドルヴァルの生涯および実生活におけるサンドとの関係を検証した後、サンドの女優観を考察した。サンドは、女優を娼婦扱いする当時の社会的通念に反して、女性が経済的に自立するための手段として女優の職業を捉えていた。そして、コメディ・フランセーズ風の技巧を凝らした演技よりも、自然な演技を好み、それを体現するドルヴァルがサンドの理想の女優であった。

さらに、ドルヴァルの恋人ヴィニーが彼女のために書いた戯曲『チャタートン』と、サンドが同じくドルヴァルのために書いた戯曲『コジマ』を比較することで、サンドが男性作家（ヴィニー）の思い描く「女らしさ」の範疇（「自己犠牲」「受動性」「消極性」「純粹無垢」）に属さない「自立した個人」をドルヴァルに演じさせようとしたことを明らかにした。また、『ルクレチア・フロリアニ』では、主人公の女優ルクレチア自身に、女優への偏見に対する反論の機会を与えただけではなく、ルクレチアをスタール夫人のコリンヌと同列に並べることで、そのモデルとなったドルヴァルを「天分を持った女性芸術家の神話」に組み入れていた。このように、ドルヴァルがサンドの小説に与えた影響は大きい。なお、分析にあたっては、ガヴァルニの図版を始めとする当時の版画に描かれたドルヴァル像を参照した。

以上の研究成果は、女性学講演会（於 大阪府立大学、2019年2月2日）で日本語による口頭発表を行った。さらにスイスでのジョルジュ・サンド国際シンポジウム *Mondes et sociabilité du spectacle autour de George Sand*（於 ローザンヌ大学、2019年6月26日）においてフランス語で発表し、フランスを始めとする海外のサンド研究者から高い評価を得た。

**③バルザックの作品研究：**フランス革命末期の農民による反乱を扱った歴史小説『ふくろう党』を取り上げ、共和軍兵士、および敵対する反革命派の農民たちと、彼らを指揮する王党派貴族、さらに総裁政府を代表する人物それぞれの服装に焦点を当て、彼らの服装によって象徴される政治思想や人物の性格を探った。分析にあたっては、当時のモードを反映する絵画やファッション・プレート、挿絵などを参照した。

「ヤギの皮」をまとった農民たちは「貧困」「獣性」「野蛮さ」の典型であり、フリジア帽（革命の象徴）に似た「ウールの汚い赤い縁なし帽」を被った彼らの姿は、民衆の混沌とした激しいエネルギーを体現していた。一方、共和軍兵士の「擦り切れた赤い裏のついた青いユニフォーム」、「肩の後ろに垂れた黒ずんだ肩章」は、困窮ぶりを示すと同時に、その冷静で「いかめしい顔」は艱難辛苦を物ともしない「エネルギー溢れる共和国」の表徴であった。彼らは、19世紀当時の軍人としての「男らしさ」（自己抑制、名誉、自分の価値観のために死ぬ術を知っていること）を体現し、新古典主義の画家ダヴィッドの描く男性像（《ホラティウス兄弟の誓い》）を具現していた。それに対して、「ふくろう党」を指揮する王党派貴族の青年は、特権階級の象徴である狩猟服を身にまとい、フェルト帽には白い帽章（王党派の印）がつけられていた。その「上品な顔立ち」に「きちんと手袋をはめた手」で剣をかざす彼の物腰は、「フランス貴族の美しいイメージ」を体現していた。さらに、警察長官フーシェによって送り込まれた密偵は、ロベスピエール処刑後の総裁政府時代に出現したアंकォヤブル（奇抜な服装を着て街を練り歩いた反動的な青年たち）の衣装で登場している。

また、女の登場人物に関しては、女主人公は総裁政府時代に流行したメルヴェイユーズの服装（体の線が透けて見えるギリシア風の衣装）で舞踏会に登場しているが、王党派の女性たちはマリー・アントワネット時代のパニエドレスを纏っていた。その過剰な装飾が、女主人公の「優雅な衣装」と対照をなし、宮廷の衣装はもはや時代遅れであった。それは絶対王政から共和政に移行する時代の変遷を物語るものである。このように服装は、歴史と深く結びつき、人物の政治的信条を表していた。しかし、女性の場合にはそれが必ずしも当てはまらず、非歴史的性質が付与され、そこにジェンダーの違いが見出された。

以上の研究成果は、奈良日仏協会「秋の教養講座 2018」（於 放送大学奈良学習センター、2018年11月23日）で発表し、論文にまとめて大学紀要に掲載した。

#### (4) 2019年度の研究成果

① **ゴンクール兄弟の作品研究**：『マネット・サロモン』を取り上げ、バルザックの『知られざる傑作』とゾラの『制作』とも比較しながら、男性画家と女性モデルの関係をジェンダーの視点から探った。まず、これらの小説に共通する特徴として、「画家の眼差し」と「欲望の眼差し」の対立が挙げられる。バルザックやゾラの作品では、芸術創造のために「画家の眼差し」を優先する男性画家によって、女性モデルが犠牲となる構図が見出された。その根底には、当時のジェンダー観が反映されていた。

しかしながら、ゴンクール兄弟の小説では、画家のコリオリスがモデルのマネットに画家人生を破壊される結末となっている。その一因として、マネットが職業モデルであったことが挙げられる。モデルは自分の体を売り物にする点で、「娼婦」と同列に考えられてきたが、マネットはむしろ自立の手段と考え、自らが芸術に寄与していることに誇りを持っていた。さらに、彼女は創造行為の主体として、自らの肉体を使って芸術作品を生み出している。「モデル、芸術家、鑑賞者、絵画」のすべてを兼ねる女の肉体は男の芸術家の脅威となり、最後には「宿命の女」に変貌する。こうした「女の脅威」は、マネットの「ユダヤ性」によって増幅されることになる（「ユダヤ性」に関しては、レンブラントの絵画を通して分析した）。このように、ゴンクール兄弟には反ユダヤ主義とミソジニー（女嫌い）が多分に見出せるが、その独創性は、「自らの体への造形的愛情」を抱く女性モデルを描いたことにある。

以上の研究成果は、女性学講演会「男性作家は女性をどのように描いたのか」（於 大阪府立大学、2019年12月21日）で口頭発表し、論文にまとめて大学紀要に掲載した。

#### ② **バルザックの作品研究**

バルザックと同時代の画家ドラクロワがバルザックの作品に及ぼした影響を探った。まず、実生活におけるバルザックとドラクロワの関係を探り、バルザックがドラクロワの絵画を高く評価していたことを確認した。次に、バルザックの絵画小説『知られざる傑作』で展開される絵画論とドラクロワの絵画論との類似を検証し、さらに1840年以降の小説に登場する画家ジョゼフ・ブリドーは、ドラクロワをモデルとしていることを明らかにした。

以上の研究成果は、2020年にパリで開催されるバルザック国際シンポジウムで、フランス語で口頭発表する予定である。

#### (5) 本の出版

2016年度～2019年度の研究成果の一部を本にまとめて出版した（『イメージで読み解くフランス文学——近代小説とジェンダー』、水声社、2019年）。本書ではカラー図版を含め、多くの図版を載せ、一般読者にもわかりやすい内容の教養書を目指した。

以上の研究によって、スタール夫人、バルザック、サンド、ゾラ、ゴンクール兄弟などロマン主義文学から自然主義文学まで、19世紀フランス文学全体を俯瞰する形で、ジェンダーの視点から考察することができた。また、文学研究のみならず、美術の領域ともリンクさせた領域横断的な研究は日本においてあまり行われておらず、新しい視野を切り開いたと自負している。今後の展望としては、得られた知見をもとに、モード、およびモードに関連する絵画など視覚芸術に絞り、19世紀フランス文学との相互作用をジェンダーの視点で分析していきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Kyoko MURATA	4. 巻 19
2. 論文標題 La table des courtisanes dans La Comedie humaine	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 L'Annee balzacienne 2018	6. 最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村田 京子	4. 巻 26
2. 論文標題 女性作家と「捨てられた女」のテーマ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 女性学研究	6. 最初と最後の頁 39-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村田 京子	4. 巻 22
2. 論文標題 マリー・ドルヴァルとジョルジュ・サンド サンドにおける理想の女優像	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 女性学講演会 第2部「文学とジェンダー」	6. 最初と最後の頁 12-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村田 京子	4. 巻 14
2. 論文標題 バルザック『ふくろう党』 革命、モード、ジェンダー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間科学：大阪府立大学紀要	6. 最初と最後の頁 3-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村田京子	4. 巻 21号
2. 論文標題 19世紀フランス文学・絵画における両性具有的存在 「男らしさ」の観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『女性学講演会 第2部「文学とジェンダー」』	6. 最初と最後の頁 13-48.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村田京子	4. 巻 13号
2. 論文標題 『人間喜劇』における「娼婦の食卓」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『人間科学：大阪府立大学紀要』	6. 最初と最後の頁 3-21.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村田京子	4. 巻 12
2. 論文標題 ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』における「彫像」の象徴的意味	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間科学：大阪府立大学紀要	6. 最初と最後の頁 35-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村田京子	4. 巻 20
2. 論文標題 「服飾小説」としてのゾラ『獲物の分け前』 モード、絵画、ジェンダー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 女性学講演会 第1部「文学とジェンダー」	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村田京子	4. 巻 15
2. 論文標題 バルザックとドラクロワ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間科学：大阪府立大学紀要	6. 最初と最後の頁 3-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村田京子	4. 巻 27
2. 論文標題 ゴンクール兄弟『マネット・サロモン』における画家とモデルの関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 女性学研究	6. 最初と最後の頁 31-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 村田 京子
2. 発表標題 女性作家と「捨てられた女」のテーマ
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2018年度春季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村田 京子
2. 発表標題 服装で読み解くフランス文学 バルザック『ふくろう党』を例に
3. 学会等名 奈良日仏協会「秋の教養講座 2018」（招待講演）
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 村田 京子
2. 発表標題 ジュルジュ・サンドの田園小説における「田舎」の表象
3. 学会等名 シンポジウム「19世紀文学における田舎の表象」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村田 京子
2. 発表標題 ジョルジュ・サンドとマリー・ドルヴァル サンドにおける理想の女性像
3. 学会等名 女性学講演会第2部「文学とジェンダー」第2回、「文学、演劇、ジェンダー」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村田 京子
2. 発表標題 バルザック『ふくろう党』 革命、モード、ジェンダー
3. 学会等名 第105回関西バルザック研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyoko MURATA
2. 発表標題 Signification symbolique de la statue dans Jeanne
3. 学会等名 George Sand et le monde des objets, 21e Colloque international George Sand (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村田京子
2. 発表標題 『人間喜劇』における娼婦の食卓
3. 学会等名 第100回関西バルザック研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kyoko MURATA
2. 発表標題 Table des courtisanes dans La Comedie humaine
3. 学会等名 Balzac et la representation de la Table. Journee d' Etudes internationale (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村田京子
2. 発表標題 『男らしさ』と両性具有的存在
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2017年度秋季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村田京子
2. 発表標題 19世紀フランス文学・絵画における両性具有的存在 「男らしさ」の観点から
3. 学会等名 女性学講演会第2部「文学とジェンダー」第2回
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村田京子
2. 発表標題 「捨てられた女」のテーマ サッフォー、バルザック、スタール夫人、ジョルジュ・サンドの作品を通して
3. 学会等名 第102回関西バルザック研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村田京子
2. 発表標題 「服飾小説」としてのゾラ『獲物の分け前』 モード、絵画、ジェンダー
3. 学会等名 女性学講演会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 村田京子
2. 発表標題 ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』における「彫像」の象徴的意味
3. 学会等名 関西バルザック学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 村田京子
2. 発表標題 マリー・ドルヴァルとの関係を通してみたサンドの理想の女性像
3. 学会等名 ジョルジュ・サンド学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyoko Murata
2. 発表標題 La figure ideale de l'actrice chez ageorge Sand, a traves ses rapports avec Marie Dorval
3. 学会等名 22e Colloque international George Sand, Mondes et sociabilite du spectacle autour de George Sand (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村田京子
2. 発表標題 ゴンクール兄弟『マネット・サロモン』における画家とモデルの関係
3. 学会等名 第23期女性学講演会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Bernard GENDREL, Pascale AURAIX - JONCHIERE, Beatrice DIDIER, Kyoko MURATA, etc.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Honore Champion	5. 総ページ数 465
3. 書名 George Sand et l' Ideal. Une recherche en ecriture	

1. 著者名 村田京子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 304
3. 書名 イメージで読み解くフランス文学 近代小説とジェンダー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

村田京子のホームページ  
<http://sand200balzac.sakura.ne.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----